

# 日常災害の実態調査

— 軽度な事故の量的把握を目的として —

正会員 直井英雄<sup>\*1</sup> 同 遠藤佳宏<sup>\*2</sup> 同 宇野英隆<sup>\*3</sup>

## 1. はじめに

調査によって日常災害の全体像を定量的にとらえようと考えた場合、次のようなことがいえる。

- ① 日常災害には、広範囲に生じているごく軽度なものから、きわめてまれに生ずる重大なものまであり、これら一連の問題を一度にとらえるような調査は、可能であればそれが最も望ましいが、現実問題として、実施はまず無理であろう。
- ② 発生の頻度によって、すなわち被害の程度によって、この災害をいくつかのグループに便宜的に分け、それぞれを調査することは可能だが、この場合、とらえられたいくつかの実態をひとつの全体像へと組み立てるためには、必要な共通項が前もって考慮されていなければならない。

このうち、①のような調査は、もちろん過去にも行なわれておらず、将来も行なわれることはないと考えられる。過去に行なわれた調査は、すべて②の方針の調査であるというよく、それらは全体として重度な被害、中程度の被害、軽度な被害にわたっているが、定量的な把握および共通項という面からみると、特に軽度な被害の調査で不十分な点が多い。そこで、この調査では、軽度な被害をもたらした日常災害を対象にして、そのような所を補いつつ実態を把握し、結果を全体像の一部として組み入れられるようにしておくことを考えた。

## 2. 調査の概要

2-1. 調査方法 郵送によるアンケートの方法をとり、指定した期間(昭53.12.1.~12.31.の1カ月間)内に、住んでいる住宅に關係した事故が生じた場合も、それ以外の場合も報告を求めた。

2-2. 調査対象 種々の条件から、今回は、千葉工業大学の学生・教取員のうち、自宅から通っている人とその家族・同居人を対象とした。

2-3. 調査項目 住宅に関して①所在地、②種類(独立、集合の別など)、③構造、④竣工からの年数、住者に関して⑤年令・性別、生じた事故に関して⑥種類およびそれぞれの簡単な内容、⑦生じた時間、⑧生じた部屋、⑨けがの種類、⑩けがの処置、⑪事故の原因、などである。

## 3. 調査結果

郵送数2,300通、返送数953通、うち有効であったものの944通、この944の住宅の居住者は全体で3,798人、事故件数は1カ月間で98件であった。Fig1~4は集計結果の一部である。

## 4. 考察

この調査は住宅に限定したものであり、また調査の時期、対象などにやや偏りがあることはまぬがれないため、それほど厳密な言い方はできないが、おおよそ次のようなことは指摘できる。

Fig1. 住宅の種類、構造、竣工からの年数と、日常災害の発生の割合

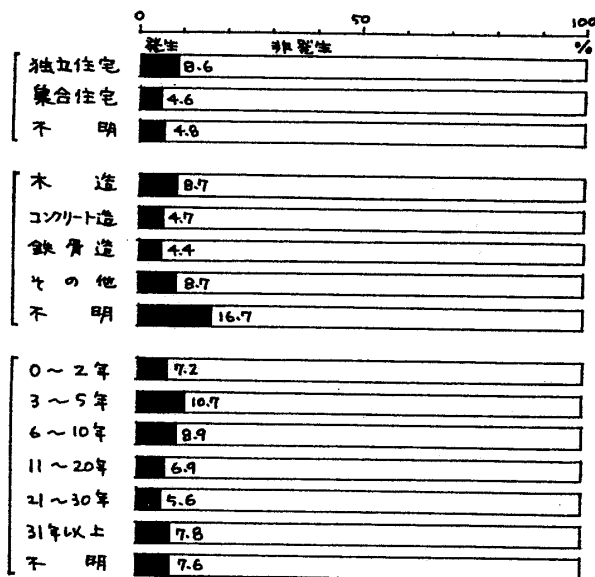
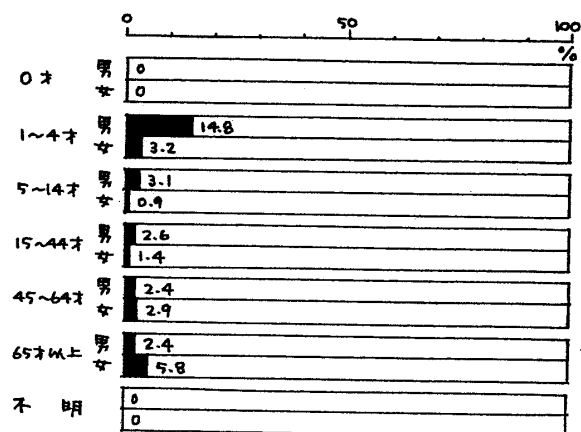


Fig2. 居住者の年令・性別と日常災害の発生の割合



- ① 住宅の種類、構造、竣工からの年数は、日常災害の発生にそれほど影響しない。独立住宅、木造の発生の割合がやや高いという程度である。
  - ② 年令との関係では、他の調査と同様、幼児と老人の危険度がやや高い傾向が見られる。
  - ③ 事故の種類としては「ぶつかり」が、また、けがの種類としては「打撲」が多く、全体としてほとんどが「放置する」あるいは「家で処置する」程度のものである。
  - ④ 部屋では、滞在時間等を考慮すると、浴室、階段の危険度が高いといえる。
  - ⑤ 事故の原因は、本人の過失にあるとするものが圧倒的に多く、建物の不備にあるとするものの約3倍である。
5. おわりに

この報告は、調査の単純な集計結果であるが、今後、既存の他の調査と組み合わせ、日常災害の定量的全体像を把握する方向を考えた。なお、この研究は、文部省科学研究費補助金によるものである。

Fig3. 事故の種類、けがの種類、けがの処置の集計結果

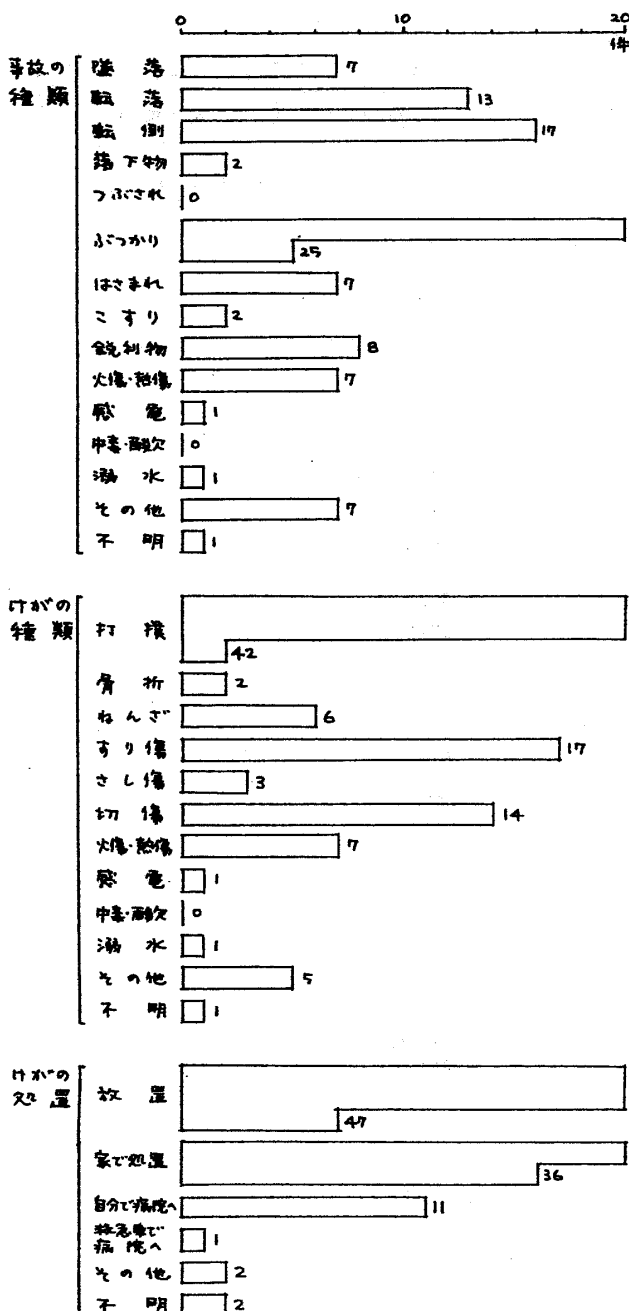
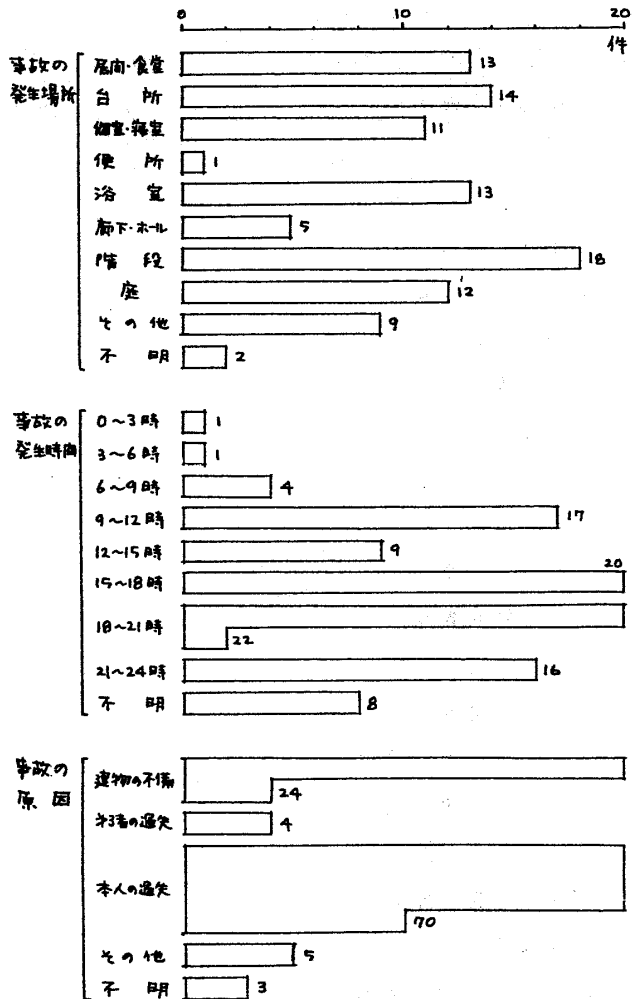


Fig4. 事故の発生場所、発生時間、事故の原因の集計結果



注：けがの種類、けがの処置、事故の原因については、1件の事故でも2項目以上にまたがる場合があるため、総件数が入っている。

- \*1 東京理科大学助教授 工博
- \*2 千葉工業大学助手
- \*3 千葉工業大学教授 工博